

# プロジェクト名 : 教育プログラムをともなった展覧会活動を通じて育む、 次世代の美術教育実践者養成プロジェクト

プロジェクト代表者 : 石上 城行 (教育学部・准教授)

## 1 研究の目的

昨今の学校教育現場における教育方針の変化は、美術科にとって授業時間数の減少という大きな問題を突きつけている。実際に授業に携わる教員にとって、少ない時間数の中で授業を行なわざるを得ない状況は、教員自身の能力が問われると同時に、教育内容への影響も懸念されている。そのような状況を打開する方策として近年注目を集めているのは、地域の社会教育施設などと連携した教育活動の展開である。

教室というある閉鎖された空間での学習は、一定の教育効果は得やすいものの、リアルな日常や実感と言った要素から乖離する傾向が否めない。日々の生活の中で人は、美術とどのように出会い、親しみ、そして心へ、どのような作用を与えているのか、多用な人々が集う社会教育施設でその実態を目の当たりにすることに可能性が見出されているのである。

そこで本研究では、地域の社会教育施設である「国営武蔵丘陵森林公園」で行なわれた野外彫刻展（森林公園アートフェスタ 2009）へ、その企画段階から携わり、特に関連して実施される教育普及活動（ワークショップなど）の実施・運営を体験的に学習することで次世代に必要な美術教育の実践者が持つべき高度な技能の萌芽を育むことを目的としている。

## 2 研究の進め方

本研究の主たるフィールドとなる「森林公園アートフェスタ 2009」は、本学の修了生で、2009年に連合大学院の博士課程を修めた奥西麻由子さんの発案による企画で、埼玉大学の学生に対して出品依頼をしに来たところから端を発している。そのやり取りの中で前述の“次世代の美術教育実践者に必要な技能を育む”へ研究の方向をシフトし、より積極的に企画運営、特にひとつのワークショップを担当することとした。

(具体的な進め方は以下の通り)

8月：チラシデザイン（案）の検討

9月：ワークショップ（10/12実施）の活動内容についてのディスカッション

ワークショップ（10/12実施）の内容についての検討

10月：ワークショップの（材料、教具など）事前準備

ワークショップ「壁面デコレーション — 夢のツリー —」の実施

12月：ワークショップの成果物の撤去作業

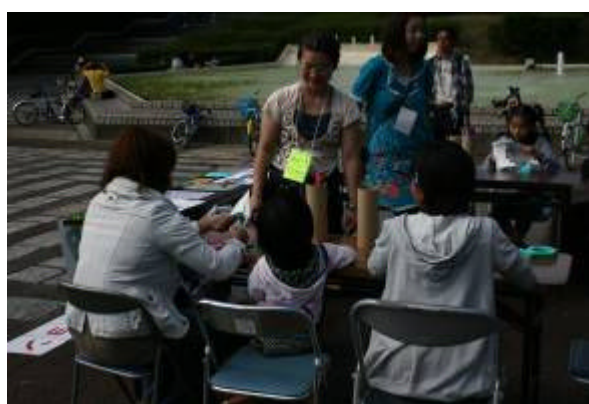
パンフレットの作成作業開始

1月：パンフレットの編集作業及び、入稿

ワークショップ「壁面デコレーション — 夢のツリー —」は、アートフェスタ初日を飾る重要な催しとして内容が検討実施された。まず森林公園中央口改装工事のため現場を覆った 40m あまりの白い壁面に、カッティングシートで大きな二つの「木」を描き、公園を訪れた方々が参加者として色とりどりの「葉」

や「花」に願い事を書いて貼り付けて「夢のツリー」を制作してもらった。

スタッフは、美重津教育専修の3年生4名、4年生1名、同大学院生1名と教員2名の総勢8名で対応し、午前11時から午後16時まで活動し、約170名程度の参加者が集った。



### 3 研究の成果

結論から言うと対社会での活動は学生たちにとって大きな刺激となった。それは学生個々の教職への志向の変化として現れたように感じている。これまでは、美術に対する意欲は強いが、美術科教員という職業に対して懐疑的なイメージを抱いていた学生が、学校現場以外での美術教育活動に触れることによって、あらためて美術科として行なうべきことの意義と目的を見出すことが出来たようである。尚、ワークショップに参加した大学院生の磯美夏子さんが、2009年度さいたま市の美術科教諭として正規採用された。

また「森林公園アートフェスタ 2009」の企画自体も大きな評価を得た。このイベントは平成21年度の国営公園公募「夢プラン」において採択された国営公園の活用促進を目的とする事業の一環で、同チャレンジ部門に寄せられた151件の中から最優秀賞を受賞している。

最後に本研究は2010年度へ向けて、その規模を拡大しつつ継続している。09年度にも出品者として、またワークショップ担当として参加されていた埼玉学園大学の森本先生や川口短期大学の押元先生が、より本格的にイベント全体の企画内容にかかわることになり、更にグレードアップしたアートイベントとしての開催を目指している。

私自身も、昨年度に引き続きアートフェスタの初日を飾るワークショップを担当することになり、現在「美術総合B」という授業でその企画内容を検討する授業を行なっている。10月には、受講学生19名で実際のワークショップを開催する予定である。